

学位請求論文審査結果の要旨

氏名 清藤 春香

論文題目

グローバル化と発達障害

—発達障害があるニューカマー・帰国子女の事例から—

審査担当者

主査：慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員

博士（社会学） 塩原良和

副査：慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員

修士（社会学） 竹ノ下弘久

副査：慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員

Ph. D. in Anthropology 北中淳子

副査：津田塾大学学芸学部多文化・国際協力学科教授

Ph. D. in East Asian Studies 川端浩平

1. 本論文の概要

本論文は、清藤春香君が2025年3月に慶應義塾大学大学院社会学研究科に提出した博士学位請求論文である。本論文は日本語で書かれており、序章と終章を含めて全6章から構成されている。総ページ数は142ページ（183,544字）であり、そのうち本文は128ページ（161,634字、付録、注を含む）、目次1ページ、文献リストは13ページである。英語と日本語で書かれた引用文献190点が文献リストに含まれている。それゆえ本論文はその分量と引用文献の数において、これまで慶應義塾大学大学院社会学研究科から課程博士号を授与されてきた論文の水準に達していると考えられる。なお本研究は質的調査法を採用しており、慶應義塾大学文学部・文学研究科・社会学研究科研究倫理委員会の研究倫理審査を受け、承認されている。

本論文の目次は以下の通りである。

序章 日本社会の多文化化と「発達障害」

第1章 研究の背景と動向、問い、分析枠組み

第2章 外国のルーツと「発達障害」のスティグマ化

第3章 「発達障害がある帰国子女」の経験

第4章 インターセクショナルな社会関係資本の形成に向けたコミュニティの可能性と課題

終章	「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」の現況と将来の展望
付録	「事前アンケート」
注	
引用文献	

以下では、各章の要約を紹介する。序章では、本論文の背景と問題意識等が示される。戦後に来日した外国人であるニューカマーの子どもと「発達障害」の交差という論点が近年注目されている。関連する先行研究や報道の内容はふたつの論点に大別される。ひとつは、ニューカマー第二世代の場合、実際に「発達障害」があっても複数の言語・文化的背景があるがゆえに医師も判断が難しいため、結果的に早期における適切なサポートが行われにくいことである。もうひとつは、学習上の遅れが目立つニューカマーの生徒が、言語・文化的背景の影響を考慮されないまま「発達障害」だと判断され、特別支援学級に組み込まれやすいことである。このうち本論文では前者の、実際に「発達障害」があるニューカマー第二世代に注目している。本論文の調査協力者は医療機関で「発達障害」という診断を受けているが、その上で、本論文ではそうした人々の実践のなかにある障害に着目し、固定化された医学的な概念としてではなく当事者の自己認識の一部としての「発達障害」を描写している。

第1章では、帰国子女、ニューカマー第二世代、「発達障害」というそれぞれの領域に関する議論の背景を示した上で、「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」に関する先行研究の動向、本研究の問い、研究方法と分析枠組みが提示される。「発達障害があるニューカマー第二世代」の先行研究では、子どもの当事者をいかに支援していくかという論点を中心であり、成人した「発達障害があるニューカマー第二世代」自身の経験は十分検討されていない。またニューカマー第二世代の中には、外見から外国のルーツがあることが分かる場合と、ルーツの可視性が比較的低い場合がある。いずれの場合もレイシズムに対処するために外国のルーツを隠すことがあるが、それは罪悪感等の心理的緊張を引き起こしうる。この外国のルーツの可視性と、同じく隠そうと思えばある程度隠すことができる「発達障害」との関連についてもあまり検討されてこなかった。そして「発達障害があるニューカマー第二世代」が複合的な差別を受けている可能性についても指摘自体はされているものの、その実態は十分検証されてこなかった。

「発達障害がある帰国子女」もまた同様の課題に直面している可能性が先行研究では示唆されている。しかし「発達障害がある帰国子女」を対象とした研究は極めて限定的である。研究者のあいだですら「帰国子女問題は終わった」という認識が見られる一方で、現在においても自分が帰国子女であることを否定的に捉え、隠そうとする事例も報告されていることを踏まえると、「発達障害がある帰国子女」の状況についても検討する必要がある。

日本において「発達障害があるニューカマー第二世代」または「発達障害がある帰国子女」の枠組みで集まったコミュニティや支援団体の実践等は報告されていない。このことから現段階では、「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」が、差別等を受ける恐れを感じずに済むネットワークを欲した時、エスニックコミュニティや帰国子女のグループ、「発達障害」の当事者会等、既存の単一の社会的カテゴリーに基づくコミュニティに属している可能性が高い。こうした既存のコミュニティと当事者の関係性も、検討する余地がある。

以上のような先行研究の検討に基づき、本研究では以下の3つ問いが設定されている。

- ①成人した「発達障害があるニューカマー第二世代」は、自身の外国のルーツと発達上の特性をどのように捉えているのか、複数の社会的カテゴリーが絡み合った排除を被っていないか、そこに外国のルーツの可視性の程度はどのように関わってくるのか。
- ②成人した「発達障害がある帰国子女」も、複数の言語・文化的背景と発達上の特性を持つことで、困難に直面している可能性があるのではないかと。
- ③成人した「発達障害があるニューカマー・帰国子女」が感情的なサポート等を必要とした時、単一の社会的カテゴリーを基盤とするコミュニティはどのように寄与しているのか。

これらの問いに答えるために、本論文では成人した「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」を中心とした調査協力者 19 名にライフストーリー・インタビューが実施された。そしてその結果が、スティグマ、交差性、信頼の範囲(radius of trust)の分析枠組みから考察された。スティグマとは、個人の特徴や属性が差別を受ける原因と化すことを示した概念である。まだ相手に知られていないスティグマを隠す行為をパッシング、既に相手に知られているスティグマを目立たせないようにする行為をカヴァリングという。交差性(intersectionality)の定義としては Patricia Hill Collins と Sirma Bilge による、「人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、ネイション、障害、エスニシティ、そして年齢等数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成し合っているものとして捉える」ツールという定義が採用されている。そして信頼の範囲とは集団が相互扶助の規範を適用させる範囲を指す概念であり、集団外部にも相互に助け合う規範を適用させるコミュニティは正の外部性(positive externalities)を、集団内部でのみ扶助を行い、集団外への不信によって内部の連帯を高めるコミュニティは負の外部性(negative externalities)を示す。

第 2 章では、成人した「発達障害があるニューカマー第二世代」が外国のルーツと発達上の特性をどのように捉えているのかについて、外国ルーツの可視性の程度に着目しつつ、スティグマと交差性の枠組みから整理される。調査協力者たちは職場や教育機関において、外国ルーツや発達上の特性について十分な理解を得られていない。外国のルーツがあると一目で分かる「ハーフ」の調査協力者の場合、マイクロアグレッションと「発達障害」が絡み合った生きづらさを感じていた。また外国ルーツの可視性が比較的低い調査協力者が、独りで困難を抱え込み依存症になった例もあった。「ハーフ」への肯定的なステレオタイプを向けられた際、それと自身の実態との乖離があると感じてスティグマに直面する例もあった。その一方で、比較的若い調査協力者からは、ADHD については近年メディア等での認知が高まり、他の「発達障害」よりも周囲にうち明けやすいという意見もあった。特に注目すべき事例として、「発達障害」を恥とみなす傾向が強い国出身の親によって、当人が通院を中断させられた事例があった。ニューカマー児童が特別支援学級に組み込まれることが必ずしも常に包摂を意味するわけではなく、むしろ外国人児童等を事実上排除する結果となる側面があるという先行研究の指摘を裏付ける事例も見られた。

第 3 章では、成人した「発達障害がある帰国子女」の経験が、スティグマと交差性の枠組みから考察される。帰国子女であることと「発達障害」であることは、互いに絡み合った生きづらさをもたらしている。すなわち日本社会において順応が求められる典型的な「日本人」らしさから乖離した「変ジャパ」としての帰国子女であることと、「発達障害」であることによる生きづらさが互いに増幅しあっている状況が観察された。それゆえ何らかの問題に直面した際、それが「発達障害」であるためか、複数の言語・文化的背景があるためか、本

人達にも判断しにくい場合がある。しかし一方で、発達上の特性に起因する生きづらさが、帰国子女であることによってある程度軽減されることもある。たとえば、「発達障害」に起因する自らの価値観が周囲から理解されなかった際、「海外」には自分と同じ価値観をもつ人がいると考えることでスティグマを免れた事例があった。ただしそうした戦略は、当事者に心理的負担をもたらしまうものでもある。本章での分析からは、多くの研究者が想定するように「帰国生問題はもう終わった」とは必ずしも言い切れない。とりわけ「発達障害」との関連を考える上で、帰国子女をこれまで以上に多文化間精神医療の対象として捉えていく必要がある。

第4章では、「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」に対し、エスニックコミュニティや「発達障害」の当事者会などの単一のカテゴリーに基づくコミュニティの構成員が正の外部性を示し、当事者の外国とのつながりと「発達障害」の両方に理解を示し、感情的なサポートを行う社会関係資本を提供している可能性を検討した。調査の結果、現時点では外国とのつながりと発達上の特性の両方について深い理解を示す社会関係資本は提供されていなかった。ただし世代交代や「発達障害」に関する情報の共有によってコミュニティ内の「発達障害」への認識が変わっていけば、こうした社会関係資本が提供されうることもし唆された。また当事者会とは銘打っていないものの、事実上「発達障害」者が多いコミュニティから「発達障害がある帰国子女」同士のつながりが創出された事例もあった。

なお「発達障害」者である調査協力者の中には、複数の言語・文化的背景があるために医師との信頼関係を築きにくい経験をし、自分が置かれている交差性を理解してもらう難しさからそうした信頼関係を最初から期待していない者もいた。その一方で、就労移行支援事業所など、「日本人」の「定型発達」者が中心となって運営する団体に居場所を見出している者もいた。

終章では、本研究の知見が総括され、それを踏まえた上での提言や本研究の限界と今後の課題が示される。本論文では複数のマイノリティ性をもつ個人の経験に対し、これまでの交差性研究では必ずしも注目されてこなかったスティグマという観点を導入する意義が提示された。そしてインターセクショナルな立場性がある人々の情緒的・実質的な支援を提供する社会関係資本の構築のために、単一の社会的カテゴリーに基づく既存のコミュニティとの連携も有効である可能性が示唆された。

先行研究が示唆していたように、ニューカマー第二世代児童が何らかの学習上の問題に直面した時、その原因が言語・文化的背景にある可能性を加味されないまま、特別支援学級に組み込まれやすくなっている現状がある。また教員が「善意」によって意図的に、「外国人としての支援」を十分受けられないニューカマー児童にその代替として「障害児としての支援」や特別支援教育を受けさせた事例もある。このように特別支援学級に組み込まれたニューカマー児童は、実際に「発達障害」かどうかに関わらず、卒業後も周囲から「障害者」とであるとみなされやすい。本論文では、ニューカマー第二世代および帰国子女であることと発達上の特性があることは、しばしばスティグマ化され、それらが絡み合った生きづらさをもたらすことが示された。それゆえ学校在籍時に特別支援学級で「障害児」としての支援を受けられたとしても、その後の社会的包摂につながるとは限らない。制度的な支援リソースの限界を放置せず、国や行政が「障害児としての支援」を代わりに受ける必要がないほどに「外国人としての支援」を充実させることが終章では提言されている。

同じく本論文の知見からは、「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」が精神科等の治療を受ける際、医療従事者との信頼関係構築における障壁がより高い可能性を考慮する必要性も問題提起される。言語・文化的背景と発達上の特性の交差について、医師から理解を得られないのではないかと考えたり、信頼できる医師に出会うために転院を繰り返した事例は、「人種」や民族に基づく背景に敬意を払いながら行う「リスペクトフル・レイシャルカウンセリング」の取り組みなど、医療従事者との信頼関係を構築するための手立てを一層充実させていく必要を示唆している。

本論文の限界と今後の課題として、終章では以下のようなことが述べられている。まず成人した「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」である調査協力者を見つけることが非常に困難であり、比較的少人数からの聴き取りに留まった。また今回の調査に協力した成人の当事者たちは、学校在籍時に日本語教育推進法や発達障害者支援法が施行されていないか、施行されたばかりで支援が未整備であった「孤軍奮闘世代」が中心である。今後、特にニューカマー第二世代については、特別支援学級に在籍していた経験がある人々が一定数成人年齢に達してくる。そうした当事者にもインタビューを行い、一層データを充実させていく必要がある。さらに、本論文の調査協力者は高学歴者や都市部在住者に偏っている。「発達障害」者に関しては高学歴であることが必ずしも経済的な安定等につながっていないという指摘もあるが、高学歴ではなかったり、都市部よりもニューカマーへの支援に充てられる資源が乏しい地方部に在住する当事者へと調査の範囲を拡大していく必要がある。

なお本論文の調査協力者の中には、日本社会の特徴と彼・彼女らが見なしているものが「発達障害」をもつ自分たちの生きづらさを増幅させていると考え、日本からの出国をひとつの解決策とみなしていたり、実際に海外での生活を選んだ知人がいる人もいた。こうした日本国外への移住が、「発達障害」者の障害観にどのように作用しているのかという点も今後の検討課題である。

2. 本論文の評価

本論文は、すでに蓄積のあるニューカマー外国人や帰国子女に関する社会学的研究に「発達障害」の軸を採り入れた日本ではまだ極めて少ない重要な研究であり、移民研究・医療社会学・多文化間精神医学の各領域において新しい知見をもたらすものである。インタビュー調査の語りにもとづく記述と考察は非常に興味深い。インタビューの結果を提示するにあたり、インタビュー対象者の語りだけではなくインタビューの問いかけや質問、相槌なども含めて記述されており、インタビューでの語りが調査者と対象者との対話の中で構築されていることが理解できる。また、インタビューの語りにもとづく考察も非常に説得的であり、発達障害を持つ帰国子女やニューカマー第二世代の意味世界や生きられる経験を非常に生き生きと理解することができる。また本論文ではニューカマー第二世代だけでなく、海外での教育経験のある帰国子女を対象に、その発達障害と日本社会への適応、統合のあり方と関連づけて論じている。帰国子女を移民研究の文脈から考察する研究はそれほど多くない。帰国子女と移民第二世代という異なる状況におかれている人々を比較し、その共通点と相違点を考察しようとしたことは、理論的にも高く評価できる。

その他、本論文の特筆すべき点は以下のとおりである。

第一に、本論文はインターセクショナリティ（交差性）という近年の移民研究や社会学の研究で注目されている理論や概念に注目し、実証研究を通じてそれを深めることで日本社会におけるマジョリティに関する斬新な分析を行っている。これまでの日本における移民・移住研究は、日本社会における（支配的な）マジョリティと周辺化された人々という二項対立的な枠組みに基づくものが多かった。また、発達障害に関しても、どうしても定型発達対非定型発達といった静的な二項対立で捉えられることで、その現象の流動性や曖昧さ、基準の恣意性といった、社会構成主義的見方で本来重視されるべき点が実際の分析では明確に描き出せないというジレンマがあった。それに対して本論文は、ニューカマー第二世代や「ハーフ」といったエスニックな意味でのマジョリティと、発達障害かもしれないという（単に社会的属性だけでなく）バイオロジーや医療・臨床的な意味での差異を重ね合わせたところに浮かび上がる生きづらさに着目することで、従来のマイノリティ論だけでなく、どこか固定化された日本社会像自体を揺るがすことに見事に成功している。バイオとソーシャルの両軸の相互作用に着目し、インターセクショナリティ概念が社会科学のみならず、医学・臨床にもたらす新たな可能性を描き出したという点で、本論文は今後、マイノリティ研究・多文化間精神医学における重要な業績となるだろう。また興味深かったのは、現在職場や学校で「合理的配慮」が法的義務とされ、人々の意識が変化していく中で、本論文はまさにその移行期にある人々の生の、どこか剥き出しの発達障害観といったようなものを浮かび上がらせており、発達障害に関する理解や周囲の対応に関する歴史的変化が感じられる点である。

第二に、本論文はそれ自体が捉えにくい研究対象である発達障害の社会構築性を、国際比較研究という手法をとらずに国内での多文化経験に着目することで明らかにしている。近年、精神医学領域の内部においても、発達障害を脳に基盤のあるバイオロジカルな障害として薬物等で治療してきたことに対する批判が起こりつつある。例えば ADHD の薬物療法に関してそのエヴィデンスとなってきた長期観察研究においても、数年間の投薬でその効果がなくなること、むしろ環境の変化によって症状そのものが消失することが注目され、より環境因を重視した対応が求められるようになっていく。それでも従来の研究では、バイオとソーシャルのどちらかを強調し、二つの相互作用性を分析するための具体的な方法やそれに沿ったデータはなかなか得られなかった。それに対して本論文は、このバイオ・ソーシャルの相互作用性を、現在日本に住んでいるが異なる国や文化、宗教での経験を持っている人々の発達障害をめぐる経験を描き出すことで、かれらの差異が、（例えばイスラムでの障害者観のように）周囲の人々の受け止め方によってその表現型も大きく異なっていくこと、つまり発達障害は極めて文化的な病であることを具体的に示している。と同時に、日本にきて外国人としての悲哀をさほど感じずに済んだのは、自分自身が発達障害者として母国でもどこかつねに疎外感を抱いていたからだと言語する男性の例のように、差異を完全に社会的なものとするのではなく、より複雑さに目配りの効いた分析を行っている点を高く評価したい。これほど身近に、国際比較・文化比較をするための手法が隠れていたのかと目を開かされる思いであった。また、精神科医たちがしばしば指摘するように、果たして日本文化がより発達障害を浮かび上がらせやすくするのかという問いに関しても、異なる文化を移動する人々の証言から一定の見解が得られたようにも思う。

第三に、本論文は学術研究においても支援の取り組みの現場においても別個に扱われていた領域における交差性を明らかにすることで、単純には把握できない排除と包摂の力学

を批判的に考察すると同時に、異なる領域間の共通性や連帯の可能性を模索している。上野千鶴子らの複合差別論などが指摘してきた、二つのマイノリティ性が絡むことにより当事者が抱える問題がより強化されて二重のスティグマが発生するという問題には、学術研究においても支援の現場においても向き合うことが躊躇われてきた。しかし、ひとつのスティグマのみの困難さを理解もしくは支援することは、結果的に二重の差別を放置したり深刻化しうる。それゆえ本論文で試みられているように、二つの属性が二重のスティグマという差別的視点を生み出してしまう力学を紐解いていくことが必要である。とりわけ本論文が焦点化している、ニューカマーや帰国子女のなかでも見た目では判断できない（無徴性の高い）人々が抱える問題はより深刻であり、社会問題として認識されづらいがゆえに自己責任で対処すべきものとして放置されがちである。また、そのような状況が二重に周辺化された人々（マイノリティのなかのマイノリティ）のみの問題として限定して捉えられがちなことが、現代日本社会における生きづらさや同調圧力といった、マジョリティも抱える共通の問題領域を理解・解決していくための視座を看過することにもなっている。清藤君はこのような現代社会における排除と包摂の最前線と向き合うべく、調査協力者との信頼関係を構築し、得られたデータから当事者たちが共に生きていくための折衝の実践のあり方や連帯の可能性を明らかにしている。決して多くは語らない当事者たちに真摯に向き合い、質的な強度が担保されたことが窺えるデータを獲得していることは、本論文の分析や考察を深めることを可能にするとともに、より現実的な支援枠組みの提案へと結実している。また清藤君の取り組んでいる研究の背景には、多様性という概念が、その出自である人権や共生という領域を越境して、経営やコンプライアンスの観点から規範的な概念として用いられるようになっていく現状がある。そのような過度な規範化は現実の多様性をめぐる理解から乖離し、場合によっては昨今のオンライン上の差別や排除にみられるように反転した排外主義的言説となってしまうという問題性を清藤君は強く意識している。本論文は、多様なリアリティを学びなおしていくべき知識として問いなおす重要性を喚起する試みであるとも評価できる。

とはいえ、どのような博士論文にも改善すべき点や今後の課題がある。そのような指摘は、審査する側が依拠する理論枠組みや方法論の特性にも大きく影響される。本論文の主査・副査はそれぞれ異なった研究領域や研究方法を基盤としており、以下に述べる本論文の改善すべき点や今後の課題も、それぞれの審査担当者の知識や背景、経験に基づくものであることをあらかじめ断っておきたい。

第一に、論文の構成について、もう少し工夫があっても良かったかもしれない。序章と第1章で内容の重複が多く、両者の関係が明確ではなかった。序章は本論文のテーマ設定に向けた導入など短い記述にとどめて、先行研究の検討などは第1章に統合したほうがよかったかもしれない。また序章の中で研究方法について論じる節が設けられているが、データの概要や研究方法については先行研究の検討を終えて本論文の分析戦略を示した後に、独立した章で論じるという構成をとっている社会学の論文も少なくない。使用するデータの概要や分析の手順は、論文の考察や知見を大きく左右する部分なので注意深く提示することが必要である。たとえばインタビューデータのコーディングの手続きについては、より詳細な説明があってもよかった。

第二に、帰国子女とニューカマー第二世代の両方を取り上げたことは本論文の非常に重要なポイントであり、大きな魅力でもあるが、なぜこの両方を取り上げるのか、すなわち両

者を取り上げることの積極的な意義や理由についての説明がやや不足しているように思われる。たとえば両者を包含する理論や枠組みとして、「マイノリティ」や「外国につながるルーツ」、「移民」といった一般化された概念や理論から比較し、その共通点と相違点を考察することも重要である。あるいは両者をつなげる理論枠組みとして、社会学的な障害学の蓄積にもう少し注目してもよかったかもしれない。

第三に、本論文では複数の章に分散されている「発達障害論」自体を、発達障害の社会構築性をより明確に位置付け、そのパターンや法則性といったことを論じた独立した章として読んでみたかった。例えば、発達障害は誰によって「診断」され、アイデンティティ化されているのか、それはどういった人々との関係性（医療者・教育者・職場の人間関係・家族・友人）の中で、可視化され、どういったときには（たとえ本人がそのように意識していたとしても）不問とされるのだろうか。発達障害の症状の度合いが年齢とともに軽くなったり、カモフラージュによっての適応が進むことも指摘されている。それはどういった状況で起こるのか、発達との関連も知りたいところである。さらには、発達障害というラベルについて本人がどう感じているのか、この部分だけをまとめて、そこに関係する社会的要因を分析する議論も読んでみたい。また、本論文で挙げられた事例にはトラウマを帯びた **complex PTSD** と、そこに発達障害が絡む複雑なケースがあることも感じられた。臨床家がこれをどう読むのかも興味がある。

第四に、発達障害をめぐる「文化差」が、個々の調査協力者の語りに依拠しているがゆえに、どこかステレオタイプ的な形で一般化されてしまっている。語りで言及されているイスラムに関してもアメリカに関しても、それぞれ状況はより複雑で、世代と共に変化していくものであることが本論文で引用される語りからも推測される（また、それぞれで求められるカモフラージュの力点も異なっているように思われる）。この点はさらに文献を調査するなどしつつ、清藤君自身の立場からその語りを位置づけ、ときに相対化するような分析がもっとあっていいのではないか。特に移住とメンタルヘルスをめぐっては、移民の方が精神的な脆弱性を抱えているという主張と、むしろ移住に耐えうるほどのレジリエンスを持っているという主張とで、従来の研究で見解が分かれている。そのような学術研究における分断は、政治的イデオロギーや政策とも絡み合っており、社会的に大きな力を産み出してしまうこともある。そうした文化の政治学に関わる部分の解釈について、もう一歩踏み込んだ分析があると望ましい。

第五に、歴史性の探究という観点からいうと、本論文の発達障害に関する考察からは時代や世代による変化を感じられるのに対して、おそらく清藤君がより詳しいであろう帰国子女・移住研究の面では、日本社会の「現在」がどこか静的に描かれている。これは実際の日本社会の現状を描写しようとした故なのかもしれない。しかし多文化間精神医学の視点からは、人種・民族・文化の境界に関して人々の態度がより柔軟に、受容的に変化しているという印象を受ける。こうした変化のあり方についての、地域のダイナミズムをより考慮した、調査協力者の語りのみに頼らないエスノグラフィックな分析、そして比較の視点を採り入れた詳細な歴史的文脈の探究を清藤君には求めたい。また、インターセクショナルリティを通じたマイノリティの連帯を描き出し、共感の可能性と限界を分析している点は秀逸であるが、それが合理的配慮等の法改正によって今後どのように変化していくのか、すなわち生きづらさを軸にした新たな連帯の場が生まれるのか、それとも制度によって従来のカテゴリーへと固定化されていくのか、あるいは一定の制度化を受け入れつつも、より柔軟で流動的

で多軸的な連帯の空間が可能になるのか、それは日本人の（エスニシティや病・障害をめぐる）アイデンティティ観をも変える可能性を持つのか、といった課題を、今後の長期的な調査で明らかにしていただきたい。

2025 年 5 月 21 日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された博士論文公開審査において、清藤君に対して審査担当者たちから上記のようなコメントと質問がなされた。清藤君は誠実な姿勢で応答し、適切に回答を行った。また公開審査終了後に傍聴者から E メールで寄せられた質問やコメントにも丁寧に返答した。そうした過程を観察することで、清藤君が自身の研究をさらに発展させていこうとする強い意志をもち、それを可能にするだけの十分な知識、柔軟な思考、そして広い視野を備えた人物であることを、審査担当者たちは確信することができた。

3. 結論

前節で指摘した課題の多くは本論文自体の欠陥というよりは、本論文における優れた成果に触発された審査担当者たちが抱いた、清藤君の今後の研究のさらなる発展への大きな期待の表れに他ならない。本論文は発達障害、ニューカマー第二世代、帰国子女という、従来個別に専門化され理解されてきた研究領域を交差性の概念から捉えなおし、一つのカテゴリーやテーマには集約できない複雑なリアリティや排除・包摂の力学を解明した貴重な研究成果である。清藤君は研究と支援の双方の現場において十分に把握されてこなかった問題に真摯に向き合い、適切な調査方法とデータの分析・考察によって論じている。本論文は、異なる他者に対する共感がいかに可能になるのかを問いかけ、その具体的な可能性と条件を示す点で、日本国内に留まらないグローバルな文脈からみても斬新な洞察を含むものであり、社会科学を超えて、医療や教育、政策といった他領域にも極めて重要な示唆を与えてくれる。今後は日本語での単著化に留まらず、英語での論文発表によって国外のアカデミズムにこの研究を知らしめていただきたい。

それゆえ結論として、審査担当者は全員一致で、清藤春香君が提出した本論文が博士（社会学）の学位を授与されるのにふさわしいと評価し、ここに報告する次第である。

以上